

氏 名	傍島 義雄 (ワバジマ ヨシオ)		
学 位 の 種 類	博 士 (芸 術)		
学 位 記 番 号	甲第 23 号		
学 位 授 与 日	平成 21 年 3 月 23 日		
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当		
論 文 題 目	食卓と祭壇と絵画 ―聖と俗のはざまから―		
審 査 委 員	主査 教 授	諸 川 春 樹	
	副査 教 授	本 江 邦 夫	
	副査 准 教 授	小 泉 俊 己	
	副査 目黒区美術館 主任学芸員	家 村 珠 代	

内 容 の 要 旨

人間が生きてゆくためには、食べたり飲んだりすることが必要不可欠であるのと同じように、必要とする人々にとっては、美術活動は大切な要素である。そして、祈るように絵画に向き合える状態が理想的な状態でもある。

私が現在、絵画制作を通して目指しているところは、聖と俗の中間領域、あるいは聖と俗とを両方合わせ持った領域だと考えている。これを食事にたとえるならば、私が目指す領域はカトリック教会のミサにおける聖なる食事と、日常生活の中での世俗的な食事との中間に属していると考えられる。

その聖と俗の中間領域を探ってゆくためにも、過去の画家達による宗教的な食卓場面の絵画と、日常的な食卓場面の絵画について考察し、それらから得たものを今後自身が制作してゆく上での糧としてゆく。

また、共食、祈り、絵画制作は共に人間独自の行動であり、私の考えによらずとも人々に生きる活力を与えてゆくものである。本論文では「食卓」と「祭壇」と「絵画」の要素を関連づけながら考察し、今後生きてゆき制作をしてゆく意欲と活力を得てゆく。

第 1 部 西洋美術史の作例から

第 1 部では西洋美術史の作例から、祈りの場である祭壇と宗教的な食卓、そして日常の食卓を扱った作品を取り上げ、「絵画」「宗教」「食事」についての考えを深めてゆく。

第1章 旧約聖書における祭壇と絵画

旧約聖書における祭壇は、神に感謝を表し和解を求める際に設けられ、そこに生け贄を捧げるための台であった。第1章では「祭壇」と「絵画」について理解を深めてゆくために、旧約聖書の祭壇場面が西洋絵画の中でどのように描かれてきたかを、ノア、アブラハム、モーセ、ヨアキムによる祭壇場面をもとに考察してゆく。

第2章 新約聖書における食卓と絵画

新約聖書の中でミサにつながる食卓場面であり、絵画の主題としてしばしば描かれてきたものとして、第2章では「カナの婚宴」「最後の晩餐」「エマオの晩餐」を取り上げ、聖なる食卓と絵画について考えを深めてゆく。

I カナの婚宴

「カナの婚宴」の話では水がぶどう酒に変容し人々を喜ばせることになるが、同じ「ヨハネ伝」に記述されている弟子達との「最後の晩餐」の席で、キリストは自身を「ぶどうの木」にたとえて話をしており、そのこととの関連が考えられる。この話のメッセージを様々に掘り下げつつ、過去の画家達の作例を主題の扱い方や造形面から、また時に絵画におけるユーモアの大切さを考慮に入れながら考察してゆく。

II 最後の晩餐

キリスト教の祭壇は食卓であり、それを囲んでミサが行われ、その食事の儀式は「最後の晩餐」に由来している。ミサの中で祭壇に供えられたパンとぶどう酒が精神的な食べ物に変化し、食べる人々の生きてゆく力になるという聖変化と、絵画制作とは関連づけられるのではないかと私は思う。

そして祭壇の上で為される聖変化は目に見える形では起こらないが、カンヴァスの上での絵画の変容は時に不恰好ではあるが、目に見える形で起こってくる。こうしたことを踏まえながら、画家達がこの主題においてどのように食卓を演出してきたかを、中世から近代にかけて眺めてゆく。

III エマオの晩餐

「最後の晩餐」の続編とも言える「エマオの晩餐」では、絶望していた人々の中に復活したキリストが現れ、聖書を説明し、共に食卓に着き希望をもたらすことになるが、この話はミサの中にキリストが現存するという神秘を想起させる。カラヴァッジョとレンブラントそしてドニによる作例を取り上げ、描かれた絵画と物語への思索を深めてゆく。

第3章 食卓画

聖と俗のバランスのとれた絵画を探ってゆくためにも、第3章では日常生活の中での食卓を扱った絵画、つまり「食卓画」の内に聖なるものや親しみやすいものを見つけてゆく。ゴッホ、ピカソ、マティス、ボナールの食卓画から、時にはそこに描かれた家族に目を向けながら考察してゆく。

第2部 自作について

第2部では、2007年と2008年に開催した個展で発表した作品について、自身の絵画を「かくれ宗教画」と位置づけながら制作動機や制作中の葛藤、その後の反省などを述べる。

2007年に開いた個展のタイトルは「いつの日か、放蕩息子が帰るために」というものであり、「ルカ伝」にある「放蕩息子のたとえ話」周囲での出来事や自身の制作態度を重ね合わせながら描いた絵画が中心となっている。

一方2008年に開いた個展のタイトルは「食卓と祭壇と絵画」というものであり、画家が立ち向かうカンヴァスと祈りの場である祭壇、また日常生活における食卓との関連を意識しながら制作した作品群である。

そしてこれらの制作と発表を通して、私の場合「食事」と「祈り」と「絵画」の三要素が関連し合って生きており、私の絵画は「聖なる食事」と「日常の食事」に挟まれるようにして、その狭間から生まれて来るのだということ、また画家とは祭りをを行う者であり、司祭と類似する側面があると感じた。